

# 悩まない心をつくる人生講義

チーグアン・ジャオ (趙啓光) 訳 町田晶

第11回

## 後悔しないこと

(本編第31章より)

無為と言うのは、後悔を恐れて決定しないことではなく、川の流れるようにたえず修正することだ。

できるかぎり心を虚寂にして、しっかりと静寂を守らなければならない。万物はすべて生長発展しているが、わたしはそれを通じてその循環往復しているのを観察する。事物は千変万化し入り乱れているが、最後にはまた各自それぞれの出発点にもどっていくのだ。出発点にもどっていくのを、静とよび、これを復命とよぶ。『道德経』第十六章)

なにかを決定するとき、そこには後悔がひそんでい。ある考えが起こったとき、それはまるで今にもほころびようとする春の花のようだ。しかし一度決定すると、それは突如稲妻へと変わる。後悔が夏のあらしのように襲来し、心のなかの花をびしょ濡れにしてしまう。その後、後悔は当初の勢いは失うものの、秋の雨のようにひたすら心をたたき続ける。そして最後に後悔は冬の雪へと変わり、ゆっくりと舞い落ちては心の生傷をふさぐ。

老子は「無為にして後悔なし」と言う。行動すれば後悔がやってくる。なぜなら、最初に取る行動がまちがっていないという事はまずないからだ。まちがいを犯したくないければ、何もしないのが一番よい。老子の「無為にして後悔なし」には、その無為の思想が反映されている。無為と言うのは、後悔を恐れて決定しないことではなく、川の流れるようにたえず修正することだ。英語の「correct」

は正しい、まちがいないという意味の形容詞だが、動詞になると、正しくするために変化を加えるという意味になる。つまり、正しく (correct) あるためには、過去のあやまちを嘆くのではなく、つねに修正 (correct) し続けなければならないのだ。

つまりこれが、無不為だ。道を歩くとき、初めに踏み出した一歩の方向が正しくないことに気が付き、引き返す。はじめに歩き出す方向をまちがえたからといって後悔するだろうか。そんなことはない。人はたえず両足の向かう方向を変化させて体全体を前に進める。つねに方向を変えながら踏み出す足は無不為であり、それによって自然に前へと進む体は無不為だ。たくさんの誤った方向はたがいに相殺されるので後悔することがない。すべての問題は自然に解決する、これが道だ。未来を憂えず、過去を悔まず人生を歩んでいこう。取るに足らない人間になってみよう。その過程ですべてのことが恐れずにできるに違

いない。夜明けの雲は朝日に照らされしだいに色を失うが静かなままであり、陽光を通すけれども揺らぐことがない。山をかすめて得意げになる雲はなく、谷に沈んで鬱々とする雲もない。雲はなにもしていないように見えるが、実はあらゆることをしている。山頂へ上がるのに恐れることなく、谷を通り過ぎたことを悔むこともない。これがすなわち無為にして無不為の心だ。いい気にならず、弱気にもならず、ただおだやかに流れにまかせる。

小川はいともたやすく岩を乗り越えさらさらと流れる。岩は清水を泡立たせ、こころよい旋律をつむぎ出す。人生の障害物はせせらぎの中の岩のように道程をより美しいものに変える。それゆえモーリス・K・トンプソン (James Maurice Thompson) は「小川はさらさらと、古い音楽のように夢に入り込む」と言った。これこそが人の生きる道だ。ささいな障害物ぐらいいは塞ぎ止められることがない。岩にぶつかった流れは湾曲するか二つに分かれる。まさに老子が「水は万物を助けるのがうまくて万物と争わず、みなのがやがる場所にとどまっているから、それで道にもっとも

近づいている」と言ったように。状況に応じて最良の対応をする。ときに乗りこえ、ときにあきらめ、ときに無為となり、ときに無不為となり、恐れも後悔もなくなつて進む。これがあるべき姿だ。以前、父に頼んで私のノートに言葉を書いてもらったことがあった。父は次のように記した。

啓光へ 人に寛容に、自分にも寛容に。かつて私は、人には寛容に、自分には厳しくあるうとした。しかし人に寛容になることはできたが自分には十分に厳しくすることができなかった。八十歳にもなつて人生観は変わるものか。

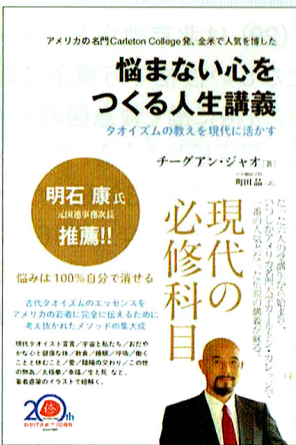
——一九五五年九月十二日、中秋節の三日後、父。

物理学の教授で南開大学の教務主任だった父はたいへん思慮深く、八十年の時を費やして自分と人にどのように応じればよいかを学んだ。我々は人に寛容になるべきで、また同時に自分に対しても他人に対するのと同じように寛容であるべきだ。世のなかに完璧なものなどない。だから自分が、あるいは人がつまずいた時、やさしくおだやかに対応し



チーグアン・ジャオ 北京出身。カールトン・カレッジ教授、同済大学特別招聘教授、清華大学客員研究員などを歴任。中国社会科学院大学院で英米文学修士号、マサチューセッツ大学で比較文学博士号取得。著作に「A Study of Dragon, East and West」、「Do Nothing & Do Everything」、「古道新理」、「老子的智慧」、「世路心程」、「客舟聽雨」、「コンラッド小説選」など。2015年3月、マイアミでの遊泳中の事故により永眠。ミネソタ州の「スタートリビューン」紙で「北極オーロラの星」と評された。

町田晶 日中翻訳学院修了。東北大学文学部東洋日本美術史専攻、東北大学大学院文学研究科中国哲学専攻。学生時代の一人旅で中国文化の奥深さと中国人の温かさに触れたことから本格的に中国語を学ぶ。翻訳得意分野は思想、哲学、文学、食文化等。



“パンを手に入れることはもとより大事だが、その美味しさを楽しむことはもっと大事だ” 比較文化学者であるチーグアン・ジャオ氏が、身近な例から老子の人生哲学をわかりやすく解説した一冊。「よりよい老後」のために心身ともに無理を重ねる現代人に向け、老子の教えをもとに、肩の力を抜いて自然に生きることを勧める。2016年4月、日本倫報社刊

よう。人の目を気にせず、自分だけの道を、方向を調整しながら歩んでいこう。たえず修正し、変化させ、後悔することなく、宇宙の流れのままに生きよう。悩まず、自分を責めず、悔まず、恐れず、疑わず、杞憂せず、ゆつたりと生きよう。